

2018  
おもろ  
チャレンジ

## ハワイの伝統的な禪“Malo”の現状から探る 日本の禪の将来

総合人間学部 2年

清田 倫太郎

アメリカ合衆国

2018年9月7日-

2018年10月4日



### 渡航概要と内容

出国に際して元々9月4日に関西国際空港出国の予定であったが、台風24号の影響で空港に閉じ込められてしまった。空港へ行く前日にニュース等で台風がくることは知っていたが、台風が去った翌日早朝に出国の便が振替となったため空港へと出向いてしまった。約28時間空港で過ごすこととなった。元々LCCの航空会社であったため別の空港で振替便も出ず、ホテルなども提供されなかったため大変な思いをした。結局空港から出た後、翌々日の便を急いで買い無事出国となった。

ハワイ州オアフ島に到着してからオアフ島にある歴史資料館などへと出向いた。しかしMaloに関する情報は全くなかった。確かにMaloを履いたネイティブハワイアンが描写された絵やネイティブハワイアンの作った像など、Maloを履いたモノは多くあったがMaloに関する資料は皆無であった。大きな書店や博物館などの本を探してもMaloに関わるものは皆無であった。

ポリネシアカルチャーセンターを訪れたところ、ハワイ文化を扱っている地区ではMaloに関する情報は皆無だったが、そこで行われるショーではネイティブハワイアンを扮した人物はMaloを着用していた。その他のポリネシアの国々の人々も禪状の下着を履いていた。またそこに併設されているブリガムヤング大学ハワイ校の日本からの留学生のガイドにブリガムヤング大学ハワイ校の図書館にあるMaloに関わる書籍を探してもらうことができ、その書籍を元に様々な情報を得た。

帰国数日前にワイキキのカラカウア通りで行われたAloha FestivalのFloral ParadeではMaloを着用した人がネイティブハワイアンに扮して通りを練り歩いていた。またそのパレードの際観客としてMaloを着用している人がいたため彼から話を聞いたり一緒に写真を撮ってもらったりした。また連絡先を交換してもらうことができ今もコンタクトを取り続けている。



## 渡航を通じて感じたこと・学んだこと

Malo は横幅 23cm 長さ 280cm 以上の布を腰に巻きつけて身につける。履き方は日本にある六尺褌とほとんど同じである。日本の六尺褌では前垂れ部分は巻きつけてしまうが、Malo ではそれをそのまま前に垂らしてある。色に関しては単色で文様のないものもあれば精巧な文様を遇らえたものもある。その素材となる布は Kapa (Tapa) と呼ばれる樹皮布が用いられていた。Malo の製作は唯一男性が関わる家事であった。樹皮を布とするには樹皮を木の棍棒のようなもので叩き続け樹皮を伸ばさなければならず中々の重労働であった。現在のハワイ州では Kapa を製作している方がおりある方は自家農園で育てた植物の樹皮を用い製作しているが、その Kapa を製作している人はかなり少なかった。一見 Kapa は失われつつある文化であるが、現在製作している人は伝統的に製作し続けているのではなく近年になって改めて製作を始めた人たちであった。以前までは Kapa の製作は途絶えていたのである。Kapa の製作の文化は現在徐々に戻りつつある。

ハワイの褌 Malo は日本でいう着物のように外着として使われておりハワイアンネイティヴに扮する時に着用されるものであった。そのため Malo 一枚で大学の卒業式に出席したり街を歩いたりしている人がいるのだということがわかった。現状として日常的に着用している人は全くおらず、また元々の素材 Kapa でできた Malo を着用している人は皆無である。さらに Malo を専門的に売っている店も無かった。そのため Malo も日本同様失われつつあるよう思ってしまうが、ハワイ州では伝統的な文化を残し実践するイベントや施設が豊富にあり確実に残り続ける文化だと確信した。とはいえ外着という文化的コンテキストからも Malo が日常的に着用されるという機会は無さそうである。この先まで Malo は残り続けるが「過去のモノ」として残り続けるのである。

以上のハワイの現状を踏まえて将来の日本の褌について考察する。現在の日本では褌文化を実践的に残すイベントは減りつつありそれを扱う施設は皆無である。その点日本はハワイ州と比べてより褌文化が失われつつあるように考えられる。しかしハワイ州での Malo とは違い日本の褌は下着として今でも残っている。実際褌の健康的利点の側面に着目して褌の専門店がいくつも設立されるなど下着として広められようとしているのである。現代の人にも違和感なく着用されるようなお洒落なデザインを遇らえた褌が広く男女性別を問わず広く販売されている。日本の褌

はそれまでの「過去のモノ」から「現代のモノ」として変容を遂げ日常的に残りうるものであると感じた。しかしハワイ州とは違い褌そのものと触れ合うことのできる機会が全くない日本では、より褌と触れ合う機会を広めていくことが必要であると判明した。



## ■ 今回の経験をどのように今後生かしていくか

今後褌と触れ合う機会を広めていくことが必要だと判明した。そのため今後より多くの人に褌と触れ合ってもらえる機会を増やしていく。また褌の製作を行い京都大学の学祭 11 月祭などで市場価格よりも低価格で販売を行う。

また今回の調査で実際に Malo を履く人物とコンタクトが取れ今後とも Malo に関する情報が得られそうであるため、今後 Malo の研究をしていく上での布石とする。

今回はハワイ州に限った褌の調査であったが世界中の他の地域の褌の調査の布石ともする。ハワイの褌が日本にある褌の一つと酷似していたのもありグローバルな褌の伝播なども調査したいと強く感じた。

## ■ 今後本プログラムを希望する学生へのアドバイス

物価の高い地域を調査したり留学したりする際どうしても食費など生活費が嵩んでしまうため、渡航先の物価などの情報はプログラムに応募する前から確認しておき予算の大まかな算出しておくべきである。

安いからという理由だけで渡航に必要なものなどを選びすぎないようにすべきである。自分の場合 LCC を航空会社として選んでしまったため様々なトラブルなどに巻き込まれてしまった。無理をせずお金をかけるところはお金をかけるべきだと痛感した。

## ■ 主な奨学金の使途

- \*宿泊費
- \*渡航費
- \*現地調査費
- \*食費
- \*現地交通費
- \*海外旅行保険 など